

特集に寄せて

矢羽々崇

2023年7月15日(土)、成城大学9号館グローバルラウンジにて、成城大学国際編集文献学研究センター主催シンポジウム「ヘルダーリン 学術版編集の歴史—翻訳のための編集を考える」が開催された。

フリードリヒ・ヘルダーリン(1770-1843)は、多くの作家や哲学者に影響を与え、日本でも詩人の伊東静雄や作家の三島由紀夫らによって受容された。語られることの多いこの詩人は、しかし、読まれることの少ない詩人でもある。

このヘルダーリンの詩を今の日本の読者層に届けるべく、新たな翻訳を企画するなかで、テキスト編集の問題に向き合う必要が出てきた。どの版を底本にするか、という単純な問題ではない。手稿がファクシミリ版として参照可能になった今、往々にして複雑を極める手稿をどう参照し、どう翻訳に活かすかなど、検討すべき課題は多い。

そのために、このシンポジウムでは、4つの「史的批判版(historisch-kritische Ausgabe)」を中心に、これまでのヘルダーリンの学術版編集の歴史をたどった。「史的批判版」とは、ある作家のすべての手稿・出版物・メモ類から生涯にかかわる資料、受容に関する資料などをすべて網羅しようとする一大プロジェクトである。なお、ツィンカーナーゲル版は「史的批判版」にあるべき「資料部(Apparat)」が欠如している。バイスナー版には「史的批判版」との名称は付されていない。しかし、ツィンカーナーゲルは「史的批判版」(正確には「批判的歴史版」と名づけられている)を意図して詳細な「資料部」(未完)を用意していた。また、バイスナー版は「史的批判版」と呼ぶに相応しい内実を伴っており、編集文献学の世界でも、その前提で議論が進められることがほとんどである。そのため、今回のシンポジウムでは、4つの版を一括して「史的批判版」として扱う。今回のシンポジウムで取り上げているヘルダーリンのほか、ゲーテやシラー、あるいはホーフマンスタールやリルケ、ツェランなど、ドイツ語圏の主要な作家でこの史的批判版が作られている。近年では、手稿の写真を活用した版、デジタル技術を活用した版も見られる。ヘルダーリンにおける4つの学術編集版とは、次のものである。

ヘリングラート(Norbert von Hellingrath)版(1913-1923年)

ツィンカーナーゲル(Franz Zinkernagel)版(1914-1926年)

バイスナー(Friedrich Beißner)版(1943-1985年)—通称シュトウットガルト版(StA)

ザトラー(D.E. Sattler)版(1975-2008年)—通称フランクフルト版(FHA)

その編集の歴史においては、ヘルダーリンの狂気と詩作のかかわりをどう理解するか

という問題が大きな位置を占めている。後期の作品を狂気の産物とするかつての立場から、次第に詩論にもとづいた厳密な構成を持つものだとする理解へと変化していった。そして、詩人の作った手稿空間と向き合い、そこから作品の重層性を読むことが求められている。

これら史的批判版、特にバイスナー版とザトラー版の成果を土台として、専門家による学術的な編集がほどこされた著作集が出版されている。特に注目に値するのは、次の3つである。

シュミット (Jochen Schmidt) 版 (1992-94年)

クナウプ (Michael Knaupp) 版 (1992-93年)

レイタニ (Luigi Reitani) 版 (2001、2019年：ドイツ語イタリア語対訳)

今回のシンポジウムは、こうした編集や研究の変化を踏まえ、新たな翻訳の基盤となるテキストを編集するための土台作りの試みとして企画された。

最後に、タイトルにある「学術版編集」という言葉について説明したい。「学術版編集」という日本語は、一般には耳慣れない言葉である。これは、ドイツ語のEditionを翻訳したものである。英語のeditionであれば、いわゆる「編集」や「出版」という意味で日本語話者にとっても違和感はない。しかし、ドイツ語圏で広くスタンダードとして用いられる辞書Dudenを引くと、

„[besonders wissenschaftliche] Herausgabe“ 「(とりわけ学術的な) 編集出版」

„in bestimmter Form [wissenschaftlich] herausgegebenes Werk“ 「特定の形式で (学術的に) 編集出版された著作」

という解説がなされており、特に「学術的 (wissenschaftlich)」という言葉が、カッコ入りながらも眼を引く。つまり、ドイツ語圏でEditionという言葉を用いるとき、そのすべてではないにしても、研究者が、学問的な知見をもとにして詩人なり作家なりの手稿や出版物と向き合い、それを一定の基準のもとにテキストを編集する作業 (および註釈をつける作業) とその結果が想定されている。日本においても、特にドイツ語圏の作家などを翻訳する場合には、どの版を用いて翻訳の土台テキストを確定するのか、どのように註釈すべきかなどの点において意識されるべき思想であると考えている。

国際編集文献学研究センター主催

編文研シンポジウム「ヘルダーリン 学術版編集の歴史 — 翻訳のための編集を考える」

日時 2023年7月15日 13:00-16:30

場所 成城大学9号館グローバルラウンジ

プログラム

1. 発表

- | | |
|---------------|------------------------------------|
| 小野寺賢一（大東文化大学） | 著作集の配列とジャンル区分の問題
— ヘリングラートを中心に |
| 林英哉（三重大学） | 影に隠れた史的批判版全集
— ツィンカーナーゲル |
| 大田浩司（帝京大学） | 成長する有機体としての詩
— バイスナーとシュトゥットガルト版 |
| 益敏郎（熊本大学） | 編集のミュトスとロゴス
— ザトラーとフランクフルト版 |
| 矢羽々崇（獨協大学） | 学術版編集の可能性
— シュミット、クナウプ、レイタニ |

2. 質疑応答

モデレーター：明星聖子（成城大学国際編集文献学研究センター長）

なお、今回の特集にあたっては、編集文献学の用語について、ある程度の統一を図ることにした。ただし、対象や文脈によって完全な統一が難しい場合も多く、(1)できるだけ統一する用語、(2)統一が望ましい用語の2つに分けた。最終的な判断は、各論者に委ねた。

(1) できるだけ統一する用語（Alphabet順）

Apparat 「資料篇」
diplomatische Darstellung 「写実的転写」
historisch-kritische Ausgabe 「史的批判版」
Studienausgabe 「研究版」

(2) 統一が望ましい用語

Ausgabe 「版、著作集」（全集）
autorisiert 「（作者が）出版公表にかかわった」
Druckfassung 「出版稿」（印刷稿）
edierter Text 「（学術版）編集されたテキスト」
Edition 「学術版編集（行為として）」「学術編集版（成果物として）」「編集」（エディション）
Editionswissenschaft, Editionsphilologie, Textologie (DDR) 「編集文献学」
Editor 「編者」（編集者）

emendiert 「改訂された、改訂～」

unemendiert 「改訂されていない、非改訂～」

Erläuterung 「(StA)解説」

Faksimile 「写真(版)」(ファクシミリ、ファクシミリ)

Fassung 「稿」「草稿」

Handschrift ⇒ Manuskript

kritisch-historische Ausgabe (Zinkernagel) 「批判的歴史版」

Interims-Ausgabe 「暫定版」

Kommentar 「注釈、註釈」

Lesart = Variant 「ヴァリエーション」(テキスト異同、テキストの異同、異同、異文、校異)

Leseausgabe 「普及版」

Lesetext 「レーゼテキスト」(テキスト)

Manuskript 「手稿」(草稿、手書き原稿)

Orthographie 「正書法」、場合によって「綴りの表記法」

Textband 「本文篇」(本文編、テキスト編) ← Apparat 「資料篇」参照

Textgenese 「テキストの生成」

Textkritik 「テキスト批判」

Treppenmodell 「(StA)階段モデル」

Überlieferung 「伝承」

Variant ⇒ Lesart